にっせき ぬくもり通信

Vol. 9
2007年4月1日

http://www.matsuyama.jrc.or.jp/

編集・発行／松山赤十字病院
〒790-8524 松山市文京町1番地
TEL089-924-1111 FAX089-922-6892

《基本理念》人道・博愛・奉仕の赤十字精神に基づき医療を通じて地域社会に貢献します。

加齢による眼の病気とアンチエイジング

第一眼科部長
児玉俊夫

Ⅰ.アンチエイジング（抗加齢）医療とは

いつまでも若さを保ちたいというのは古今東西、人間の強い願望です。アンチエイジング（抗加齢）医療は加齢が自然現象ではなくひとつの病気としてとらえ、生活の質を高く保ちながら健康・長寿を実現することをめざしております。眼科領域では「加齢性」と名のつく病気が多いためアンチエイジングの観点からも、眼の健康を保つことは豊かな老年社会を送るためにも不可欠と思います。

Ⅱ.加齢にともなう眼疾患

ヒトは誰でも年を重ねると健康であっても眼の加齢による変化は避けられず、眼は加齢を自覚する臓器といえます。高齢化社会において充実した生活を送るためには視力を保つことも重要です。よい視力を保つにはどうしたらよいか、視力を損なう眼疾患にはどのようなものがあるか、その治療法は？　加齢に伴う眼疾患のうち代表的な老視、白内障、緑内障および加齢性黄斑変性症をとりあげ解説いたします。

① 老視

50歳前後になると誰でも身体の衰えを自覚するようになりますが、最初に気づくのが眼の症状です。まず近くのものが見えにくくなり、とうとう老いの兆しが現れてきたかとがっくりきます。加齢により水晶体の弾力性が失われると、近見時にピント合わせができなくなる状態を老視といい、一般には老眼と呼ばれています。50歳前後で調節力は極端に低下するので老眼鏡が必要となってきます。

② 白内障

白内障とは透明な水晶体が混濁するために光の透過性が減少し、光散乱も生じるために視力が低下する病気です。ヒトは50歳を過ぎると約50%に水晶体の混濁が生じ、80歳を越えると80%以上に水晶体の混濁が見られ、高齢化社会において白内障診療は眼科医療の中心であるといえます。白内障の疫学調査より赤道近くでは高緯度地帯より白内障の発症年齢が若く、水晶体の色も褐色をした成熟白内障が多いことがわかっており、白内障と紫外線量との間に相関関係が認められております。白内障の進行予防には紫外線カット、例えば、真夏の日中は帽子をかぶる、サングラスをかける、などのちょっとした心づかいが大切です。

白内障の治療のうち点眼薬は白内障の初期ではその進行予防に有効なこともありますが、水晶体の混濁をなくすことはできません。白内障が進行すれば手術になりますが、現在の白内障手術は超音波を用いた手術で時間も短く、手術翌日からよく見えるなど、今や最も安全な眼科手術のひとつといってもよいと思います。日帰り手術が最近増えてきましたが、糖尿病、高血圧などの合併症のある人は短期間でも入院されて手術を受けられた方がよいと思います。

③ 緑内障

緑内障は一般に眼圧が上昇して視神経が傷害され、視力低下や視野障害が生じる病気です。緑内障には急に眼圧が上がって強い眼痛や頭痛、吐き気や急激な視力低下が生じる急性緑内障発作（閉塞隅角緑内障）と、ゆっくりと視野障害が進行して気がついたら視野欠損を生じている慢性緑内障（開放隅角緑内障）に分けられます。わが国では40歳以上では17人に1人が緑内障であることがわかってきました。従来考えられていたより緑内障の有病率は高く、緑内障は「ありふれた病気」であり、かつ「失明にいたる可能性のある」疾患であるとの認識が必要です。

④ 加齢性黄斑変性症

加齢性黄斑変性症では網膜の中心に異常な老化現象が生じて、視野の中心が見えない、ゆがんで見えるなどの症状が出現します。その危険因子としてタバコや紫外線の影響がわかっております。この病気の多い欧米では緑黄色野菜の摂取やルテインを中心としたサプリメントの内服が推奨されています。治療法としてレーザー照射がありますが、再発例も多く根本的な治療法がないのが現状です。

Ⅲ.眼科検査の重要性

自覚症状による加齢性眼疾患の簡単な鑑別表をつけました。もし、思い当たる症状があれば、すぐに眼科を受診された方がよいと思います。

自覚症状から考えられる加齢による眼の病気

・近見視力低下	⇒	老視
・霧視、羞明	⇒	白内障
・視野欠損	⇒	慢性緑内障
・変視症、中心暗点	⇒	加齢性黄斑変性症

「地域がん診療連携拠点病院」に指定

松山赤十字病院は、平成１９年１月３１日付けにて『地域がん診療連携拠点病院』に厚生労働省より指定されました。

地域がん診療連携拠点病院とは、平成１６年度から開始された「第３次対がん１０か年総合戦略」の日本のがん対策・総合戦略の一つとして、全国どこでも質の高いがん医療を受けることが出来るよう、がん医療の均てん化を図り、各都道府県におけるがん診療の拠点となるように指定された病院であります。その役割は、「診療機能」「研修体制」「情報提供」を整備して、地域の皆さまが質の高い医療を受けることが出来るようにすることであります。

現在、当院におけるがん医療は、内科、消化器科、呼吸器科、呼吸器外科、外科、泌尿器科等を中心に、更に、肝・胆・膵センター、胃腸センター、呼吸器センター等のセンター化によるチーム医療を実践し、地域の皆さまに質の高いがん診療を提供するように尽力しております。今後は、「地域がん診療連携拠点病院」としてがん診療機能の充実を図り、情報提供において、がん治療フォローアップ体制を確立できるように努力したいと考えております。

がん診療連携拠点病院指定通知書

松山赤十字病院

平成１８年１０月３１日付け１８保第５２６号で愛媛県知事より推薦のあった貴院については、平成１９年２月１日付け厚生労働省健康局長通知「がん診療連携拠点病院の整備について」に基づき、地域がん診療連携拠点病院として指定する。

なお、指定の有効期間は、平成２３年１月３０日までとする。

平成１９年１月３１日

厚生労働大臣　柳澤　伯夫

病院ボランティアについて

当院が「地域医療支援病院」の名称使用承認をうけてから約１年が経過いたしましたが、これも偏に皆様方のご理解ご協力の賜物と改めてお礼申し上げます。

この間、松山医療圏の住民の皆様に地域医療の役割・機能分担並びに連携をご理解いただく一環として「成育医療センター」を立ち上げ、同時に「成育医療ボランティア」を受け入れました。

お蔭様でこの活動が順調に運営されておりますので、以前から再開のご希望がございました外来患者様に対する「案内サービス」や「車椅子サービス」などのボランティア受け入れを平成１８年１０月から実施いたしました。

現在、「松山赤十字病院ボランティアマニュアル」に沿って、当院を退職された１４名の皆様にご参加いただいております。

ナースキャップを廃止しました

平成１４年に本社看護服装規程が変わり、ナースキャップの着用に関しては、施設長が定めることとなっていました。当院においても、多くのナースの希望を取り入れ、今年１月１日からナースキャップを廃止しております。身だしなみについては、今まで以上に留意し、誰からも好感が得られ、白衣に似合った髪型に努めてまいります。

眼科市民公開講座のお知らせ

松山で開催される第４６回日本白内障学会・第２２回日本眼内レンズ屈折手術学会では来る７月１日(日)午後、以下のテーマで市民公開講座を開催いたします。皆様、是非ともご参加いただきますようお願いいたします。

主　催：第46回日本白内障学会・第22回日本眼内レンズ屈折手術学会
日　時：平成19年7月1日(日) 13：30～15：30
場　所：愛媛県県民文化会館サブホール
講　師：宮田眼科院長　宮田和典先生「**白内障、その現状と最先端の治療法**」
慶応大学眼科学教授　坪田一男先生「**屈折矯正手術から始まるアンチエイジング医学**」